

他者のいない言葉*

——木下順二「夕鶴」論——

千田洋幸

(国語科教育)

1

「夕鶴」の物語の冒頭ちかく、「鶴の千羽織」への謎をいだきつつ機屋をのぞき「む惣どと運ず」に対して、つぎのようにつうがふるまう場面がある。

運ず わっ。

惣ど あっ。こ、こら、留守の間に上がりこんで……

つう ……? (鳥のように首をかしげていぶかしげに二人を見まもる)

運ず へい、おらはその、向うの村の運ずつちゅうもんで、あの布のことで

はいつもどうも与ひようどんに……

つう ……?

惣ど そんな、なあかみさんよ、実はその、布の話をこやつから聞いて……

おらも向うの村の惣どつちゅうもんだが、ちよつと話があつて来たもんだ。

……全体それは、こういつちや何だが、ほんなもんの千羽織かね?

つう …… (ただいぶかしげに見ているが、ふと物音でも聞いたように、身

をひるがえして奥に消える)

惣ど ……?

運ず ……?

つうのいう「あたしの世界」と、惣ど・運ずの価値世界との断絶がはやくも示されているわけだが、こうした場面があきらかにしてしまふのは、自己と相いれない相手との対話を徹底的に拒絶するつうに固有の志向であり、それゆえに他者という概念をまったく所有することのない彼女の属性なのである。惣ど・運ずは、はじめからつうとコミュニケーション不可能な人物として設定されているが、両者の隔たりの本質は、惣ど・運ずが人間でつうが異類の化身であることや、両者が世俗的な物欲／超日常的な純粋性という対立に裂かれていることにあるわけではない。惣どと運ずを、己れと等価な「存在」として認識しようとしないう権力的なつうの意識と、つうにたえず聖性を付与し、超越的な地点に位置づけようとする物語の基本的な方向性が、両者のあいだに埋めることのできない距離が横たわっているかのような虚構を形づくるのである。

おなじように、与ひように対してつうの「愛」も、与ひようを他者として——すなわち、自己の価値世界とは異なった世界を所有する者として——認識したうえのものではまったくない。つうは「あたしの世界」、すなわちつうに固有のイデオロギー世界の枠内に収まるものを支配下に引き入れ、そうでないものを切り捨てていくにすぎない。逆にいえば、つうはみずからの価値世界を防御しつつ強化し、さらにはそこに己れのアイデンティティを確固として定めるた

めに、「あたしの世界」の精神的奴隷として、与ひようの存在を必要とするのである。

つう 与ひよう、あたしの大事な与ひよう、あんたはどうしたの？ あんたはだんだん変って行く。何だか分らないけれど、あたしとは別な世界の人になって行ってしまふ。あの、あたしには言葉も分らない人たち、いつかあたしを矢で射たような、あの恐ろしい人たちとおんなじになって行ってしまふ。どうしたの？ あんたは。どうすればいいの？ あたしは。

(中略) あんたはほかの人とは違う人。あたしの世界の人。だからこの広い野原のまん中で、そと二人だけの世界を作って、畠を耕したり子供たちと遊んだりしながらいつまでも生きて行くつもりだったのに……だのに何だか、あんたはあたしから離れて行く。だんだん遠くなって行く。どうしたらいいの？ ほんとにあたしはどうしたらいいの？……

与ひようは、惣ど・運すと、つうにとつては俗悪でしかない「金儲け」「都見物」のための相談コミュニケーションを重ね、「都は立派なもんだろのう」「金もほしいでよ」と、〈外部〉への欲望をはじめていきつつある。それに対し、つうは、与ひようが彼女の手中から逸脱し、彼自身の世界を所有しようとすることにひたすら憤り、おびえる。「もうどこへも行かないでね」「誰ともよその人と話なんかしないでね」「いつまでも今のままのあんたでいてね」と、幼児的ともいえる言葉を並べつつ、与ひようを「あたしの世界」Ⅱ〈内部〉に押しとどめようとするのである。その極まりが、「あたしのほかに何がほしいの？ いや。いや。あたしのほかに何にもほしがっちゃいや。おかねもいや。かうのもいや。あたしだけかわいがってくれなきゃいや」という、自身の支配欲をあらわにした言葉であろう。ここには、「あたしの世界」に属してはいたはずの与ひようが、つうにとつての他者へと変貌しつつあることへの恐怖と、それが引き起こすヒステリックな反応が露骨に示されているといえよう。

もつとも、与ひようが〈外部〉のうながしによっていかに変わっていくことも、またそのことがいかにつうを脅かそうとも、つうは物語のはじめから終末まで一貫して不変のままである。彼女は終始超越的、あるいは特権的な位置を

あたえられており、それゆえ変貌する可能性をうばわれている。というより、つうは対話という行為を拒否し、他者の概念をも欠いているがゆえに、〈外部〉によってみずからの世界を組み換え、変貌してゆく契機をもたないのである。だから、「夕鶴」というテキスト自体も、他者とはじめから隔絶している主人公が、その必然として人間界(Ⅱ他者の構成する世界)から去ってしまうという静的な物語の域を出ていないし、作中人物が対話行為そのものによって変容していくダイナミズムも、個々の異質な言葉が屹立するポリフォニックな構造も欠いた、つうのたんなるモノローグ世界と化してしまっているのである。

戯曲は、いうまでもなく上演するために書かれるテキストであり、それは異質な人物たちの複数の声の葛藤によって構成されている。だが、もともと対話を志向しているはずの戯曲というジャンルに、これほど対話への意志を徹底的に欠いた主人公が登場するのは珍しいといべきだろう。「あたしの世界」にひたすら自閉・自足して、与ひようには同化を強要し、「あたしとは別な世界」に属する惣ど・運ずに対しては、穢れにみちた存在として忌避し排除しようとするつう。そういう人物を主人公に仕立てあげたところに、「夕鶴」の根本的な逆説が存在するのである。

2

つうの与ひように対する感情について考察するとき、「無償の愛」などという言葉がしばしば用いられるが、むしろそれは正確ではない。稲葉三千男も指摘するように、つうと与ひようのあいだにも、つうが千羽織を織って与ひように贈与し、与ひようはその見返りにつうに愛情を捧げる、という交換が成立している。それは、「あたしのほかに」なにも欲望してはならない、という強制的なものにある愛情でもある。千羽織は、それが商品価値をもつゆえに惣どと運ずの介入をもたらすわけだが、一方では、つうが与ひようを支配する権力の源泉でもあるのである。

考えてみれば、つうと与ひようのあいだには、つねにこのようなモノないし感情の交換が成立していた。「ただあたしをかわいそうに思っ矢を抜いてくれ」から、与ひようのもとに来たつう。千羽織を織ってやると、「子供のよう

喜んでくれた」与ひよう。その喜びを得るために、「苦しいのを我慢して何枚も何枚も織ってあげた」つう。このような、商品経済とかかわらない交換行為によって、二人の結びつきが強化されるとも考えられるだろうし、またそれはつう—与ひようの共同体のゲマインシャフト的な性格を示しているともいえる。二人のあいだでは、千羽織と愛情とが交換されることによって、布を織り、贈与しながら自己の権力を肥大させていくつうと、「ろばたで寝てばかり」のヒモ化した与ひようという関係が確立されていく。そのような閉ざされた世界にこもっているかぎり、彼らは幸福なのである。

前述したように、そこに「外部」の論理、すなわち商品交換の論理をもちこもうとするのが、惣と運ずである。むろん、つうの千羽織は幾度か貨幣と交換され、暮らしをささえてきたらしいから、二人の生活がまったく商品交換と無縁だったわけではないのだが、すくなくともつうは、千羽織を「売る」ためではなく、自己の存在の一部ないしは象徴として与ひように贈与してはたはずである。しかし、惣と運ずにとつては、千羽織を商品化し、貨幣へと転化させることそれ自体が目的となる。マルクスは『資本論』において、「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる」とのべているが、「夕鶴」における商品交換の発生は、その過程を正確になぞっているといえる。千羽織の商品交換は、つう—与ひようの共同体と惣と—運ずの共同体が接する点ではじまり（その接点に立つのは与ひようである）、また千羽織がひとたび商品になれば、それはつう—与ひようの関係世界の内部でも、利潤を生み出す商品としての意味をもつことになる。「布を織れ。すぐ織れ。今度は前の二枚分も三枚分もの金で売ってやるちゅうだ。何百両だてよう」という与ひようの言葉が、そのことを裏づけているのはいうまでもない。

つうが忌み嫌う「おかね」＝貨幣は、与ひようが足を踏みいれつつある商品交換の世界に必須のもの、すなわち「外部」の共同体との商品交換を媒介する存在であった。岩井克人が指摘するように、「貨幣とは……共同体にとってはつねにその外部を代表するものであり、不可解な力をもったまさに「異物」そのものなのである」。つうが貨幣を恐怖するのは、それが与ひようと彼女二人だけ

で完結している世界——商品交換をとまなわかない、千羽織と愛情の交換によって成りたつ世界——を破壊する、「外部」からの闖入者だからなのである。

他者との対話＝言葉の交換も、商品交換も、ひとしなみに嫌悪の対象とする（それを一言で、「交通」の拒絶といいかえてもよい）つうは、二人の共同体に貨幣が流入することを当然許しはしない。だが、与ひようにしてみれば、そこに、つうの権力支配からのがれうるひとつの方途があった。すなわち、つうの織る千羽織を貨幣と交換されるべきものと位置づけてしまふこと、不特定の他者による流通と消費の対象に供し、そこに刻印されたつうの個人性を剥ぎ取ってしまふことによつて、つうの権力の象徴である千羽織の意味性と呪術性を、徹底的に解体することができたはずなのである。

だが終末では、「布をしっかりと掴んだまま立ちつくす」というト書きによつて、この後、千羽織が与ひようの手に死蔵されるであろうことが暗示されている。「その布、一枚だけは、いつまでも大事に持っていてね」というつうの最後の呪縛の言葉により、商品交換の世界に移行しようとする与ひようの意志は、結局中途半端なものに終わらざるをえなかった。それは、「夕鶴」の物語世界の全体が、商品交換を悪とするロマンティックな認識にたがぬかれていますからでもある。物語のコンテクストにおいては、都の風景にაცოგაღე、千羽織を商品化して貨幣を獲得しようとする与ひようは否定的に語られざるをえない。だが、つうのロマンティックな認識は、この場合、独善的な自己幻想以外を意味しない。彼女に比べるなら、与ひようの方がはるかに「外部」を志向する人物、外界にむけて自己を開いている人物だといえるのである。

3

「夕鶴」の言語＝科白に関しては、作者である木下順二自身がさまざまな解説をのこしている。少々引用が煩雑になるが、そのなかで重要と思われるものをいくつか拾いだしてみよう（傍点は原文）。

実は佐渡の方言をしんにしながら、しかしいろんな地方のなまりを取り入れて、僕はあの男たち（注・「夕鶴」に登場する男たち）のせりふを書

いた。……僕のつもりは、いわば「普遍的方言」というものをつくってみたいということであった。方言的なニュアンスやリズムや味わいを強く保ちながら、しかしどこかの地方の人々にも分る言葉というようなものを。

(中略)

一方僕はつうのせりふにおいて、標準語と呼ばれるものの中に含まれている夾雑物や不必要な要素を整理した、その意味で純粋な日本語というものを探ってみたつもりなのだが、いずれの場合も、生活と切り離して言葉だけをつくるということは誤りであるに違いないけれども、とにかくまあ、そういうような言葉の実験を、僕は『夕鶴』でやってみたつもりだ。

……この作品の最初の形を書いたころ、それは太平洋戦争の始まる直前か始まってすぐの頃だったが、私はだんだん孤独になって行く自分というものを感じていた。非常時下、戦時体制のなかで、だんだんに親しい友人とさえ、本当に心をゆるして話しあうということが必ずしもできなくなってきていた。つまり自分の「世界」と他人の「世界」との断絶を私は感じていた。(中略)

……そういうふうな別々の世界に住む人々、『夕鶴』でいうならつうと、与ひようたちのそれぞれの世界を表現するためには、なにか新しい工夫があると私に思われた。そこで私は、つうにはいわば純粋な日本語を、そして与ひようたちには民話本来のことばである農民的なことばを、というふうに、違ったことばを使わせることを考えついたのであった。

……つうに「純粋日本語」をしゃべらせることは自然に思いつくことができ、そうすると、つうと男たちとの世界がはつきり違うという効果を自然に生み出すことができた。

戦争中の、ことばの断絶ということが思い出された。理解してくれていると思っていた友人に洩らした戦争非協力のちよつとしたことばの故に、いつ警察に引っぱられるかという不安にさらされることばが、必ずしも稀ではなかった。戦争に関する相手の考えがいつの間にか変わっていて、こちらのいうことばが、意外にも全く理解してもらえないというケースにぶつか

ることが、間々あった。

これらの部分からだけでも、さまざまな疑問を引き出すことができる。作者がつうの科白について語る際にしばしば用いる「純粋な日本語」とはどのような言葉なのか。「普遍的方言」なるものは存在しうのか。作者にとって「ことばの断絶」とはなにを意味するのか、等々。

いうまでもなく、現実に話される言葉、書かれる言葉に、「純粋な日本語」などというものは存在しない。言葉は、その内部に歴史性・地域性・階層・社会的位置・イデオロギー等々の要素をつねにふくんでおり、言葉を発話する主体がそうした多層的な差異からのがれることは不可能なのである。当然のことながら、『夕鶴』においてつうが語っている「標準語」も、ひとつの社会的言語、制度的言語であるにすぎない。「純粋な日本語」とか「一番いい日本語」とかいった観念は、そういう差異——作者のいう「夾雑物」——を抹殺したうえに成立する言語上の優生思想、すなわち「日本語」の純血¹¹浄化主義¹²の産物にはかならないのである。

物語世界においては、その「純粋な日本語」というイデオロギーを強化するために、いくつかの装置が用意されてもいる。ひとつには、つうの意識や行動の「純粋さ」と、彼女の使用する言葉の「純粋さ」とを共犯させ、後者が前者を表象するかのようないメージをつくりだしたこと。さらに、つうの語る言葉と、与ひようや物どが語る方言とを差別化・階層化したこと。とくに後者に関しては、これが国語教育の現場で、方言差別として問題にならなかったのはなぜなのか、と疑いたくなるほどの露骨さだといえよう。

そのように考えるなら、つうと他の人物たちとの「ことばの断絶」とは、どのようにとらえられるべきなのか。作者は、戦時中の自己と他者とのコミュニケーションの不能を仮託したものだと語り、しかもぬげぬげと自分をつうの立場、「友人」を物ど達の立場において、過去の自分の正当化をはかったりなどしているのだが、そのような物言いはまったくの転倒といえよう。つうが体現している、他者との「断絶」＝言葉の排除、「純粋な日本語」という観念の捏造、いじましい被害者面などは、他者に対する同化と差別と被害者意識のあいだを揺れうごきつづけた、戦中—戦後の「日本」の表象にはかならないからである。

すなわち、「夕鶴」は、他者不在の（日本）のメンタリティを、ロマンティックかつセンチメンタルに美化してみせた寓話なのだ。だからこそ、ある種の読者は、つうの像にこの上ない共感と安堵感をいだいてしまおうのだといえよう。

この意味で、「夕鶴」は戦争の産物である、とひとまずは考えることができる。しかしそれは、作者がご都合主義的に語っているような、あるいは一部の研究者が肯定的に語っているような、戦争に対する「非協力」、批判の産物などではまったくない。つうという人物が形づくっている意味こそ、（日本）の否定されるべき負の側面そのものである。だが、そのような歴史性がまったく見えずなくなってしまうほど、「夕鶴」は、戦後五十年のあいだにかたく防御されてしまった。その困い込みの様相が、現在問いなおされる必要があるはずである。

4

文学テクストがある社会的・文化的コンテクストの内部でのみ意味をもちうることは指摘するまでもないが、テクストによっては、そのコンテクストが複数存在し、それぞれの場において独自の意味や役割が生成される、という事態もしばしば出現する。

「夕鶴」は、その典型的な例といえよう。戯曲である以上、あくまでも上演を前提としたテクストであるわけだが、一方で初演とほぼ同時期に国語教科書に採録され、現在ではすでに古典的な教材としての位置を獲得している。千回を超える公演を数えて戦後を代表する演劇の地位を獲得しつつ、同時に教科書教材としても延命しつつける、という形で、つねに二種のコンテクストに内属してきたテクストなのだ。この演劇／国語教育（教科書）という、まったく異質なはずのコンテクストが、いわば協同して、「夕鶴」を、戦後を代表する戯曲／教材としての地位に押しあげてきたといえよう。たとえば作者自身や、つう役として著名な山本安英が、「夕鶴」の舞台やテクストについて飽きもせず語りつづける¹⁶一方、教材論や実践のレベルでは、つうを中心化する読解が横行し、また朗読・群読、劇化といった方法によって演劇の真似事じみた活動が行われる、というぐあいである。この意味で、「夕鶴」は、通常の文学作品や教材とはまた異なった形でカノン化されてきたテクストなのである。

とりわけ、国語教育の場には、「夕鶴」のイデオロギーが正当化されやすい条件がそろっていた。「純粋な愛情」や「物欲の否定」といった、生徒にとつて一見反抗しにくい通念。簡単に二項対立化することができる物語構造と人物配置。つうの語る「美しい日本語」の権威化と方言の周縁化。戯曲だから、というだけの理由で選択される朗読・群読・劇化等の活動、それによる無批判な本文受容……。これらの要素が、教室という場でさらに強化されることにより、「夕鶴」はいっそう反動的なテクストと化していく。

だから、「夕鶴」の国語教材としての可能性をまだ求めようとするのなら、このテクストにおいて提示されている価値世界をいちいち転倒していくほかはない。と同時に、もはや言い飽きたことながら、（国語）イデオロギーともこのようなテクストを延命させてきた教科書そのものの体質が問われなければならないことも、また指摘するまでもないであろう。

それにしても、今回「夕鶴」に関する研究文献を調べてみて、このテクストの言葉、あるいはテクストについて語られた作者その他の言葉に対し、無批判な言説がおおく目についたことには、いささか驚かざるをえなかった。そういう読者は、いまだに「感動」をもってこのテクストを読み、あるいははかつて山本安英が演じた舞台を想い起こしたりなどしているのだろうか。もしかすると「夕鶴」には、「言葉そのものに対する鈍磨」という快楽を読者の内に喚び起こす魔力のごときものがあるのかもしれない……。というのは、たぶん買い被りすぎなのである。とはいえ、「夕鶴」が、そういう読者が褒めたがるタイプの物語であることは否定できない。「ファン」と名指されるような一部の支持層によって、ひとつのテクストが狭隘な聖域に封じこめられているような状況。「夕鶴」のテクスト分析や教材論・実践報告の言説は、そういう状況を打破するためにこそ生みだされなければならないはずである。

注

(1) 与ひようやつうに対する態度、金銭に対する態度において、惣とと運ずのあいだに差異があることはいうまでもないが、ここではとりあえずこの二人を、共通する価値世界を有するものと見なしておくこととする。

(2) 「夕鶴」の「現実逃避」性と、それを肯定する「伝統的、民族的な心情」とをいちはやく鋭く批判した鈴木敏子「木下順二作『夕鶴』批判」(『日本文学』一九六七・四)に、「つうの求めた愛の質というのは、きわめて閉鎖的、保守的、静止的、排他的なものである」という指摘がある。

また、このようなつうの意識や行動に対する違和感は、授業においても、潜在的・潜在的に発生しうるものである。一例として、「筆者自身の中学での教室経験から言っても、つうが夫の欲望をひたすら否定し自分にひき寄せようとするのをエゴイステイックだとした、男子中学生がいた」(越智治雄「木下順二の『夕鶴』」『国文学』一九六五・一一)という言及をあげておこう。

(3) 稲葉三千男「現代コミュニケーションの理論」(一九七五・四、青木書店)に、「つうの生産行為は……自分の存在(の一部)を与ひょうに他有化せしめることによって、与ひょうの存在を我有化しようとする行為である。つうの羽毛(を原料とした千羽織の布)と与ひょうの愛情とが交換される」という指摘がある。

(4) 古谷綱武は、つうの与ひょうに対する愛情を「無心」「純粹」ではないと指摘した。高校生の評論文を新聞で紹介している。かなり古い時期のものであり、あまり目につける機会のない文章かとも思われるので、古谷の記事のうち「夕鶴」に関連する部分を掲げておく。

《高校誌にあらわれた文芸活動は全国的に、女子のほうがはるかにさかんである。文章をたのしむ主婦の増加や女流の文壇進出の目立ってきた背後には、こうした若い世代の動きが見られるのである。ただし、文芸評論だけは、きわめて少ない。少ない代りに、とにかく納得してよめるものの比率は、詩歌や小説にくらべると格段に高い。

十数編の文芸評論をよんでみて、もともと光っていると思っただのは、梅村きよさんの「夕鶴試論」(岐阜県坂下高・女子坂下高合同文芸部誌「友樹」35号)であった。背伸びしない克明な探求が、しっかりと書き重ねられている。愛は無欲・無心では成り立たない。布を織ることによって与ひょうの愛の確保を希求したつうは、愛という面から見るとその最初の出会いから、無心・純粹ではありえなかつた。つうを単に、無心・純粹なるものの象徴と見ることはできないというのが、梅村さんの結論である》(古谷綱武「高校誌から——少ないが光る女子文芸評論の活動」『朝日新聞』一九六五・七・一八)。

このように、つうの「無欲・無心」「純粹」に疑義をつきつけようとする生徒の読みが、注(2)での例と同様、はやい時期からあらわれてきていることに注意しておく必要があるだろう。

(5) フェミニズム理論がすでにあきらかにしているように、夫婦や家族の結びつきを「愛」や「融和」の名のもとに語ろうとするのが近代家族のイデオロギーである。いうまでもないことではあるが、「夕鶴」は、原話として『佐渡昔話集』の「鶴女房」を踏まえ、民話劇としての体裁をそなえているにもかかわらず、完全な近代の物語なのである。

(6) 引用は大月書店版による(岡崎次郎訳、一九七二・三)。

(7) 稲葉三千男は、「メデイウムとは、超越界と人間界という断絶しながら重なって接している二つの世界の『媒介』である。……それに対してミッテルは、人間界の中間のあいだの交換を『媒介』する」と定義し、「夕鶴」の「悲劇」の要因を「メデイウムとして与ひょうとの仲を媒介するはずの千羽織りが、ミッテルとして運動しはじめ、その流出の運動に与ひょうが巻き込まれてしまう」ことに見出している。「メデイウムとミッテル」と『国文学』一九七九・三三。稲葉の読解は、つうと与ひょうの世界が破綻する理由に関する、これまでの読みの最大公約的な見解といえるよう。

(8) 岩井克人「ヴェニス商人の資本論」(一九八五・一、筑摩書房)。

(9) 「夕鶴」のせりふ(『新劇通信』一九五八・三・五。ただし引用は「木下順二集」1 一九八八・四、岩波書店 に拠る)。

(10) 「つうと与ひょうたち」(『山本安英の会公演パンフレット』一九六六・九。ただし引用は前出「木下順二集」1 に拠る)。

(11) 「鶴女房」から「夕鶴」へ(『毎日グラフ』一九八四・八・二六。ただし引用は前出「木下順二集」1 に拠る)。

(12) 注(9)に同じ。

(13) さきの引用文中の「普遍的方言」という概念も、それ自体が矛盾であることはいうまでもない。木下順二は、自作における方言の使い方に關して、柳田国男が自分を「人民の敵」と呼んだ、というエピソードを紹介しているが(『日本語について』「ドラマが成りたつとき」一九八一・七、岩波書店)、柳田にしてみれば当然の反応であろう。木下は、各地の方言を寄せ集めて架空の方言をでっち上げ、しかも

それを「純粹な日本語」（じつはたんなる標準語）の劣位に置く、という二重の虚偽を犯していることになる。

(14) 宮岸泰治「つうと戦争体験」〔国文学〕一九七九・三、井上理恵『近代演劇の扉をあける ドラマトゥルギーの社会学』（一九九九・一二、社会評論社）など。

(15) 「夕鶴」の教科書掲載史については、「夕鶴の世界」編集委員会編『夕鶴の世界——第二次総合版』（一九八四・九、未来社）、府川源一郎「夕鶴」（木下順二——教科書教材史）〔教育調査研究所研究紀要〕45 一九九二・一二、松崎正治「木下順二作品の変遷」〔文芸教育〕臨時増刊 一九九四・四を参照のこと。ちなみに、「夕鶴」の初出は「婦人公論」一九四九年一月、初演は一九四九年一〇月、教科書にはじめて採録されたのは一九五二年である。

(16) たとえば山本安英『女優という仕事』（一九九二・一二、岩波新書）「夕鶴」の三十年」（〔国文学〕一九七九・三）等を参照のこと。これらの文章中にも「純粹」という言葉が頻出するが、それは、「純粹」という幻想ないし妄想が、この女優にとつては演技のエネルギーそのものであったことを示している。

（付記）本稿執筆後、「悲劇喜劇」二〇〇〇年十月号で、六十五人の演劇関係者を対象に行われた「創刊60号記念アンケート 20世紀の現代演劇ベスト10」に接した。それによると「夕鶴」は二十五票を集め、戯曲部門では田中千禾夫「マリアの首」、久保栄「火山灰地」について三位であった。この戯曲の根づよい人気ぶりには、いささか苦笑せざるをえない。

※「夕鶴」本文の引用は、『木下順二集』1（一九八八・四、岩波書店）に拠る。

（平成十二年九月二十九日受理）

* Words without others — A study on Kinoshita Junji's "Yūduru" — : Hiroyuki CHIDA (Department of Japanese Language Education) (Received September 29, 2000)

